



写真-1 千種川左岸高水敷に設けられた高瀬舟船着場のモニュメント

■ 高瀬舟から廻船への積み替え拠点だった上高谷の船着場

写真-1 は、旧坂越橋（きゅうさこしばし）の下流約 50m 付近の千種川左岸高水敷に整備された上高谷（かみたかや）の「高瀬舟船着場跡」のモニュメントを撮ったものです。ここは、江戸時代初期から大正時代にかけて、千種川を上り下りしていた高瀬舟の船着場跡です。



写真-2 「高瀬舟船着場跡」と刻まれた標柱



写真-3 「高瀬舟船着場跡」の説明碑

以前、千種川の舟運について調べていた時に、赤穂市教育委員会文化財課の方から船着場跡があることを聞き、ここに来たことがあります。その時は堤防上に「高瀬舟船着場跡」と刻まれた石柱（写真-2：昭和 60 年 10 月、坂越歴史研究会建立）があるだけで、高水敷は草に覆われて船着場跡は確認できませんでしたが、令和元（2019）年 10 月に来てみると、写真-1 のようなモニュメントが新たに設けられていました。

坂越・上高谷にあった船着場は、高瀬舟によって上流から運ばれてきた物資を降ろし、坂越大道(さこいだいどう)を通して坂越湾に浮かぶ廻船に積み込むための、荷積み・荷降ろしの拠点でした。波止は、後に撤去されてしまいましたが、当時使われていた石橋の石材が残されていて、往時の面影を偲ばせてくれます。



前述の説明文の中で、筆者が理解できない点がありました。それは、木津井堰が赤穂藩上水道の取水堰として水道用水を通年で取水するようになってきていることから、農業用水を取水する期間以外でも高瀬舟は航行できないのではないか、という点です。

元和 2 (1616) 年に完工した赤穂藩上水道の当初の取水地点は高雄の切山でしたが、その後浅野長直の時代に高雄の船渡に変更、さらに元禄 15 (1702) 年には木津井堰から取水するようになっています。

図-2 木津取水口見取図

なお、現在の木津井堰は、昭和 51（1976）年 9 月の台風 17 号による災害を契機に始まった千種川災害復旧助成事業により、全長 178m の可動堰に改築されています。

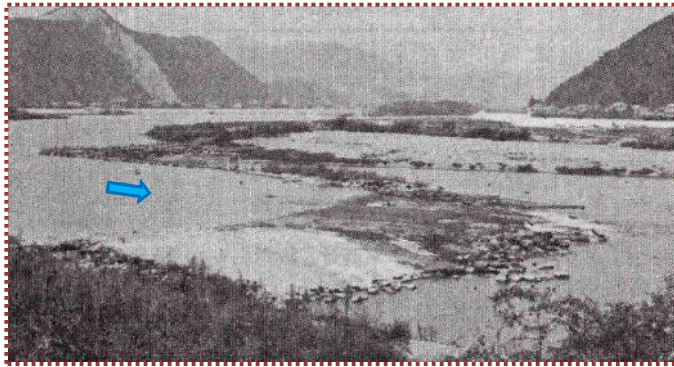


写真-4 改築前の木津井堰（『赤穂市史・第二巻』から引用・加工）



写真-5 可動堰に改築された木津井堰

■ 千種川河口部の土砂堆積で物流に変化？

宝暦年間（1751～1764）頃から上流域で行われた「鉄穴（かな）流し」による土砂流出（『ひょうご水百景』No.127 参照）や、赤穂藩が製塩のために必要な薪を得るために山林を伐採したことによる山地流域からの土砂流出により、千種川（当時は熊見川および尾崎川）河口部に土砂が堆積し、瀬戸内海を航行する廻船が加里屋港（図-3）に近づくことができなくなりました。

千種川を下ってくる高瀬舟が上高谷の船着場に着岸するようになったのは、江戸時代後期の文化・文政期（1804～1830）の頃だそうです。

この頃、製塩燃料として石炭※1 が普及した結果、赤穂における薪の需要が極端に減少しています。

そこで、内陸部で生産された薪を上高谷で陸揚げし、大八車などで坂越大道を通って坂越港へ運び、煮炊きの燃料などとして需要の高かった大坂方面へ向かう廻船に積み込んだそうです。

坂越港は坂越湾に面した天然の良港であったことから、赤穂藩における江戸・大坂への輸送は、加里屋港に代えてもっぱら坂越港を拠点とするようになりました。

しかし、大坂・江戸送りの貢租米などは、従来どおり加里屋（現・赤穂市加里屋）や中村へ運び、上荷船（うわにぶね）に積み替えて沖に停泊する廻船に積み込んだようです。

※1 石炭：日本での工業使用は江戸時代で、筑豊炭田の石炭が瀬戸内海の製塩に用いられた記録がある。元禄年間に貝原益軒が著した『筑前国続風土記』によると、筑前では山野に露出した石炭を「燃石（もえいし）」と称して、庶民が薪の代用燃料としていたようで、風呂や煮炊き用に火持ちの良い燃石を用いたと記されている。

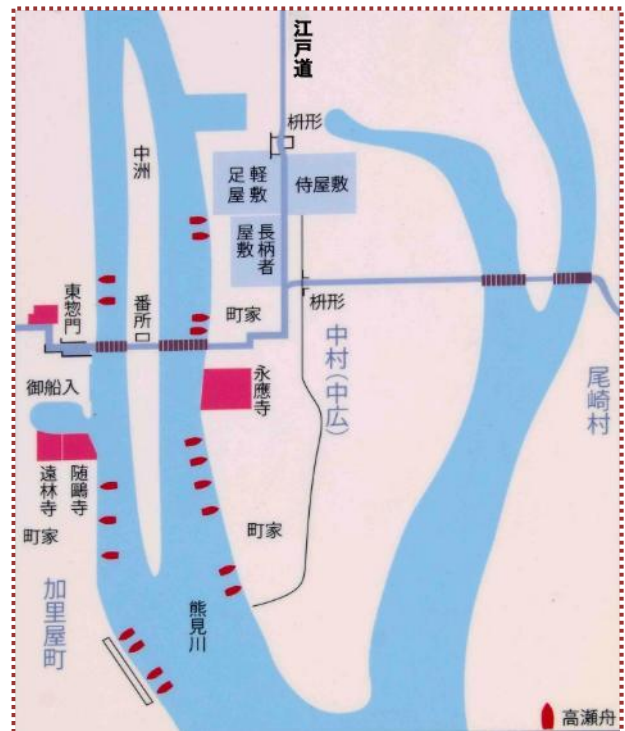


図-3 加里屋・中村周辺の高瀬舟着岸場
（「高瀬舟船着場跡」の説明碑から引用・加工）



写真-6 茶臼山展望台から生島および坂越港を撮影

■ 坂越橋三代が並ぶ

上高谷の船着場付近には、図-4の地図のように古い順に旧坂越橋、坂越橋、坂越大橋の3つの道路橋が架かっています。

平成 28 (2016) 年に完成した坂越大橋を除き、他の2橋は架橋当時のままではありません。

旧坂越橋は二代目で、しかも中央部より左岸側は架け替えられています。

また、坂越橋も両側に歩道が追加・併設されています。

① 市道上高谷線・旧坂越橋

『赤穂市歴史文化基本構想』に記載の「坂越地区年表」によると、「明治 32 (1899) 年に長さ 92 間 (≒ 167m) の木橋 (旧坂越橋) が架設された」とあります。

そして、大正 9 (1920) 年8月 24 日の大阪朝日新聞神戸付録によると、「赤穂地方は 20 日夜暴風雨となり、千種川出水して 21 日午後 7 時に水嵩 14 尺 (≒ 4.24m) に達し、坂越仮橋流出」とあります。

そこで、新たに橋を架けることになります。

坂越公民館発行の『ふるさとの歴史』によると、「大正 11 (1922) 年 12 月 1 日完成、110 間 (≒ 200m)、幅 2 間 (≒ 3.6m)、工費 3 万円」とあり、下の写真-7 がその橋です。昭和初期に千種川左岸側から撮影されたもので、橋の上を行進するのは青年訓練所 (大正 15 年設立。昭和 10 年実業補習学校と統合されて青年学校となる) の生徒たちです。



図-4 坂越大橋周辺の地図



写真-7 旧・旧坂越橋

(『赤穂相生上郡佐用今昔写真帖』から引用・加工)



写真-8 旧坂越橋

現在の旧坂越橋 (橋長 207.5m、幅員 2.1m) がいつ架けられたのかは不明です。右岸高水敷部のパイルベント橋脚は架橋当時のままで、木桁 (写真-10) の上に鋼製のスパンダー・コンクリート舗装となっています。中央部から左岸側

の比較的新しい橋脚は、昭和 38（1963）年 7 月 10 日から 11 日にかけての集中豪雨により橋の一部が流失したことから、昭和 41（1966）年に架け替えられています。

また、写真-8 からわかるように、中央部の橋脚と桁だけがやけに新しく見えます。これは、平成 18（2006）年にパイルベント橋脚の 1 本に亀裂が入り折れていることが判明したことから、赤穂市が県の道路街路課橋梁係および市町道係と協議を重ね、平成 22（2010）年度創設の社会資本整備総合交付金を使って平成 24（2012）年に架け替えたものだそうです。

なお、令和 4（2022）年 1 月に現地を訪れたところ、旧坂越橋が全面通行止になっていました。赤穂市土木課の話では、「老朽化が著しく進行していることから、地元の説明した上で全面通行止にした。」とのことでした。



写真-9 旧坂越橋（左岸側から撮影）



写真-10 右岸高水敷部の木製桁

② 坂越橋

坂越橋（写真-11）は、昭和 30（1955）年に国道 250 号の橋として県が千種川に架けたものです。上部工の型式は 10 径間の単純鋼合成鈹桁橋で、橋長 194.8m、兩岸の逆 T 式橋台は杭基礎上に設けられ、橋脚は井筒基礎上に鉄筋コンクリート門型ラーメンとなっています。

その後、昭和 43（1968）年に坂越橋の下部工に添架する形で、下流側に橋側歩道橋が設けられ、さらに昭和 55（1980）年上流側に単独で橋側歩道橋が架けられています。歩道の有効幅員は、下流側が 1.5m、上流側が 3.0m となっています。

なお、平成 28（2016）年に坂越大橋が完成したことにより、坂越橋の管理は兵庫県から赤穂市に引き継がれています。



写真-11 坂越橋（令和元年11月 右岸下流側から撮影）

③ 国道 250 号・坂越大橋

坂越大橋（写真-12）は、災害時の緊急輸送道路確保と慢性的な交通渋滞解消を目的とした延長約 1.5km のバイパス整備の一環として旧坂越橋の上流に架けられた橋で、平成 28（2016）年 3 月に完成しています。鋼 5 径間連続合成少数主桁橋で、橋長 270m、最大支間長 56m、幅員は片側 2 車線に歩道を加えて 18.5m で、平成 19（2007）年度から 9 年がかりで完成しました。歩道舗装には赤穂産のレンガが使われ、橋のシンボルとなる親柱には、かつて千種川を往来した「高瀬舟」と、赤穂義士をイメージした「火事兜（かしかぶと）」のデザインが採用されています。



写真-12 坂越大橋



写真-13 「高瀬舟」をデザインした親柱



写真-14 「火事兜」をデザインした親柱

■ モノローグ

現在、全面通行止になっている旧坂越橋は、坂越中学校の通学路になっていましたが、坂越大橋ができたことから通学路は坂越大橋経由に変更されているそうです。

旧坂越橋は、写真-1・8 を見てわかるように右岸高水敷のパイルベント橋脚部の径間長が短く、「河川管理施設等構造令」に適合していないいわゆる既存不適格の橋です。河川法制定以前から存在していた橋なので構造令の適用は受ける違法ではありませんが、洪水の安全な流下に支障をきたすおそれがあります。早急に撤去することが望まれますが、赤穂市土木課の話では撤去費がかなりの高額になることから対応に苦慮しているとか。

高齢橋は維持するのも大変ですが、撤去するのも大変なようです。（なお、一定の条件のもと改築等の実施を伴わない橋梁単体での撤去の補助制度が令和4年度に創設されています。）

川面を漂うカモ類

令和4年1月中旬、坂越橋と旧坂越橋の間の川面を50～60羽のカモが群れて漂っていた。その大部分がキンクロハジロ（金黒羽白）とホシハジロ（星羽白）。いずれも、カモ科ハジロ属の水鳥で、シベリアあたりから越冬のため飛来してきたのか。キンクロハジロの虹彩は黄色で、ホシハジロのオスの虹彩は赤色。



写真-15 千種川の川面を漂うカモ類

【参考資料】

- 1 『赤穂市史・第二巻』 赤穂市 昭和58年3月
- 2 『ふるさとの歴史 No.16～千種川高瀬舟と坂越』 茶谷豊・坂越公民館 平成4年
- 3 『ふるさとの歴史 No.25～越浦年表（戦後編）』 大西吉甫・坂越公民館 平成14年
- 4 『佐方渚果遺稿 越浦年表（復刻）』 佐方直陽 昭和57年
- 5 『かみごおり紀行～町史百話』 上郡町企画総務課町史編纂室編集 平成19年3月
- 6 『石炭、青年訓練所、キンクロハジロ、ホシハジロ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和4（2022）年5月 『ひょうご水百景』No.148

改訂：令和8（2026）年8月 『ひょうご水百景』No.148